

情報検索リテラシーを重視した授業実践の試み

原田康也 (harada@waseda.jp)

早稲田大学法学部教授 (英語・言語情報副専攻担当)

1. 早稲田大学法学部におけるカリキュラム改革

早稲田大学法学部では、2004年度以降の入学者を対象として、大幅なカリキュラム改革が進行している。この背景には、2004年度4月より大学院法務研究科（いわゆるロースクール）が設置され、既存の法学部ならびに大学院法学研究科のあり方を根底から見直す必要に迫られたという理念的な側面と、本属教員が大幅に減少する¹ため、従来実質1200名程度受け入れていた新入学生を800名程度に削減する必要があったという外在的な理由²が重なっている。

司法制度改革の議論に端を発したロースクール設置が短期間に大幅な修正を何度も経て決まり、法学部の法律科目担当教員の意識が法学部のカリキュラム改革についての具体的な検討以外のところに集中していたことに加え、語学・教養科目を担当する教員についても、西早稲田キャンパスに設置を別途検討していた新学部（国際教養学部）についての議論に関心が集中していたため、新カリキュラムの詳細についての実質的な審議が法学部の各種委員会では本格的に始まったのは2003年の6月であり、2年次以降の具体的な科目構成などについては、今後の審議を待つような状態にある。

2. 副専攻

法学部の新たなカリキュラムの重点目標は『リーガルマインドを備えた国際教養人』の育成にあるとされる。その具体的な反映として、第二外国語も含めた外国語科目の履修を従来にもまして重視するとともに、一般教育科目の履修を体系的に行えるように副専攻を設置し、履修モデルを学生に提示することとなった。具体的な副専攻としては、『英語圏』・『ドイツ語圏』・『フランス語圏』・『スペイン語圏』など外国語の履修と地域研究をコアとする副専攻に加えて、『歴史・思想』・『表象文化』・『言語情報』など、現代社会の諸相を捉える学際研究領域をコアとする副専攻も設置した。

¹ 法学部の法律科目担当教員のうち1/3ほどが法務研究科に本属変更、1/3ほどが法務研究科と法学部との併任となるほか、法学部の英語担当教員のうち7名が新設の国際教養学部にも本属変更した。

² 法学部の教室・事務室・学生読書室などがあった8号館を除却後、新たな建物を新築中で、2005年度より新校舎で授業が始まるというハード的な側面も重なり、法学部のカリキュラム・授業は根底的な変更を余儀なくされている。

3. 法学部における一般教育科目の課題

1990年代以降、一般教育科目全般について、以下のような課題があったと思われる。

- 教養基礎演習的なリテラシーの必要性：引用の表記方法や出典の記載方法も含めたレポートの書き方とプレゼンテーションソフトの使用法も含めた口頭発表方法についての具体的な指導
- 正解のない課題に対する取り組み：(マルチプル CHOICE を中心とする)『問題』には常に『正解』があり、それを覚えることが『勉強』であるという大学までの誤った観念からの解放
- クラスメイトとの本格的な意見交換：クラスメイトは競争相手であり、良い考えは他人に見せずに自分ひとりで隠し持つことが競争に勝つ方略である、という間違った考え方からの解放

こうした問題意識から、筆者は1996年度と1997年度に法学部の一般教育科目においてコンピュータ教室で演習形式の授業³を実施しつつ、発表とレポート作成を学生に課した。所期の目的はある程度果たしたものの、受講生のコンピュータ・リテラシーがまだ十分でなく、その後の授業⁴では、言語理論についてのかかなり高度な内容について限られた時間で消化できる程度に絞り込んで解説しつつ、演習問題に取り組む中で学生が多少なりとも自分なりに試行錯誤するように心がけた。

4. 英語の授業における経験

筆者が法学部で主に担当する授業は一般教育科目ではなく英語であるが、過去10年間の英作文を中心とする授業での経験も、上記に共通する課題を示していた。口頭演習も含めた総合英語の授業でも、学生の意見交換を中心とした相互交流の難しさを感じていたが、その解決策として試みた少人数グループでの意見交換やインフォーマルな意見交換については、クラス全体に対する発表と比較して、学生が非常に積極的に取り組む姿勢を見せていた⁵ことから、一般教育科目の授業実施方法にこれを取り込んでみようと考えていた。

³ これはメディアネットワークセンタ設置の『情報処理入門』(2003年度より『情報基礎演習』と名称変更)の授業実施計画の先行的試行といえる。『情報処理入門』の授業実施計画については [1] を参照されたい。

⁴ 詳しくは [3] を参照されたい。

⁵ 問題意識と授業実践の一端について [2] を参照されたい。

5. 言語学 I

上記のような問題意識と経験から、今年度の授業では講義を中心とした授業ではなく、学生を少人数のグループに振り分け、課題について各自の調査と意見交換と発表を中心として授業を進める予定であった。4 月前半に遅ればせながら具体的な授業計画を用意した段階でクラス名簿が届き、登録学生が 86 名と大規模なクラスとなり、4 人ずつのグループが 20 グループを超えることが判明した。

グループごとにクラス全体への発表を行うと毎回の発表が不可能となるため、4 人ずつの小グループをさらに 3, 4 グループずつのメタグループに編成し、発表はこのメタグループにおいて行い、各自の課題への取り組み、グループごとの課題への取り組み、メタグループにおける発表の相互評価を用紙に記入して回収することとした。各グループを構成する際には、可能な限り学年（や所属）をまたがるグループ構成となるように工夫した。

学生たちは初回から積極的に課題に取り組むとともに、授業時間外の打ち合わせを行っていた。授業が進行するにつれて、他グループの発表内容や発表形式に触発されて、次回以降の発表形式を考え直すグループが多かった。

6. 学生の反応

以下に 6 月 10 日締め切りの中間レポートに見られる学生の反応を紹介する。(文章は原則そのまま)

- この言語学という科目は、言語学についての講義を受けるものだとはばかり思っていた。ところが、いざ授業が始まってみるとそういった講義ではなくて個人での調べもの中心の授業で、発表のためのレジュメ作りにてんてこ舞いな生活を送っている。
- 先生が教室の前に出て言語の定義とか起源などを講義をしたり、情報処理の仕方を教えてくれたりするのかと思っていました。実際には「〇〇について調べなさい」といった課題が出て、それに対して自分たちだけで調べるといった物でした。必ずしも正解があるわけではない課題で、今でもどうやって調べたらよいのかと戸惑ってしまうことが多々あります。
- 発表があるのは楽しいし、良いが、発表のあとに先生の「答え」が用意されているものだとばかり思っていた。… また、検索エンジンなどのサービスの構造の課題の時は、その構造を先生が（実演やビデオなどで）説明してくれると思っていた。課題を進めていくうちに『答え』なんてないということを実感したが、せめて「まとめ」が欲しい。
- 一回目の授業の時に毎回課題を各自で調べてグループ内で検討する、という形式だということを知り、実際にそれから回数を重ねる毎に、大変ながらも自分達で調べながら学ぶ、という授業形式が非常に自分のためになっているという実感が増してきた。特に毎回複数のグループに対して発表し、評価しあうことで、メタ・グループ内でお互いの調べた情報を共有できることはもちろん、お互いの情報の比較検討、情報の検索手段についてのバリエーションの増加、レジュメとして情

報をまとめる上での切り口等、お互いに学べる点が非常に多く、効率的な学習方法であると考えてる。

- 発表という機会を通して、メタグループ内で他のグループとの差異化をはかるために発表を分かりやすく、詳細なものにするよう考えてみるといった効果的なプレゼンテーションについて自然と学ぶことになった。アプローチをずらしてみる、あるいはレジュメのレイアウトを考えてみるなどといったことは、今後も役立つことだろうと思う。
- 客観的なデータを対象として取り組むようなものではないものに対し、個人がそれぞれの異なった意見を他人にぶつけ、そしてそれを洗練していくというプロセスについて得るものが大きかった。メールでの議論では、そういった本質的な問題については、論点が曖昧になり、自分が言いたかったことがうまく伝わらないもどかしさが出てくるということに直面し、結局大学で集まるのは億劫だと考えていた私も、一度集まって直接議論することに賛成することになったのである。そして、直接議論することにより、自分の考えが抱えている矛盾や思い込みが明らかになり、他のメンバーの意見によって刺激され（ときには矛盾を指摘し）、それぞれの意見について隙がなくなっていくという感覚は面白いものであった。

7. まとめ

本稿で紹介した授業方法は、従来教養基礎演習ないし情報基礎演習的な授業方法を取り込むことがためらわれがちであった中大規模の授業においても、調べとまとめと発表の授業スタイルを取り込むことが可能であり、学生にとっても、自主的な学習のためのよい動機付けとなることを示すものと思われる。クラス全体に対する発表となると過度に緊張する学生も多いため、メタグループによる発表形式は、学生がリラックスして相互の発表を聞き、相互評価しコメントを行うという意味でも有効であった。また、1990 年代から比較するとインターネットから収集できる情報が質量ともに飛躍的に充実し、検索エンジンも有効に活用できる時代となってきたことから、『検索リテラシー』を情報基礎演習の中核として捉える必要が生じてきているように思われる。

8. 参考文献

[1] 原田康也・辰己丈夫・楠元範明, 「『情報教育』の情報化」, 情報処理学会研究報告, Vol.2000, No.20, コンピュータと教育 55-6, pp.41-48, 情報処理学会, 2000 年 2 月 18 日. (平成 13 年度山下記念研究賞受賞)

[2] 原田康也, 「エーワンのマルチカードを用いた英語応答練習」, 情報処理学会研究報告 CE-69-3 pp.17-22, 情報処理学会, 2003 年 5 月 16 日.

[3] 原田康也, 「prolog で学ぶ句構造文法」, 第 11 回全国大学情報教育方法研究発表会資料集, pp. 42-43, 社団法人私立大学情報教育協会, 2003 年 7 月 5 日.